

教育用計算機システムの更新に携わって

総合情報処理センター長

蘆 田 昇

現在の教育用計算機システム（以下、システム）が今年の３月に５年目に入り、契約期間の最終年となる。今は、次のシステムへの更新へ向けて、導入のための準備作業が始まったばかりだ。

前回のシステム更新の際には副センター長として導入計画から仕様書の作成、導入、日常の運用に至るまで携わった。現システムには、更新に関わる一切から現在に至るまで、センター長という立場になって、センター員の協力や多くの方の協力を得ながら種々のことに携わってきた。現システムの更新を５年前にタイムスリップして、あれこれ振りかえってみる。

現システムへの更新に向けての仕様書作成における、当初からの最重要課題は、環境都市工学科棟のものづくりアトリエをＣＡＤの利用も可能な総合情報処理センターの第４の演習室にすることにあった。センター長である自らに、これを実現することを使命にするとプレッシャーをかけた。

前システムのクライアントパソコンの総台数を１００台規模から１５０台規模へ一挙に１．５倍に増やすことにほかならない。さらに、クライアントパソコン１５０台が同時利用しても十分な性能が発揮できるサーバ環境を整えなければならない。限られた原資のなかでこの要件を満たすことが可能なのか、調査に多くの時間を割かれた。幸いにして、当初から目標とするシステム構成を仕様書に記述でき、これを実現することができた。

加えて重要視しなければならなかったのが、４、５年先をも見通してクライアントパソコンのハードウェアとソフトウェアの環境を整えることだった。４、５年先であっても、授業や演習の利用においてパソコンの性能に過不足を感じさせず、満足度が高く、ストレスを生じさせないパソコン環境を仕様書作成の段階で太鼓判を押しておくことは、至難の業であった。幸か不幸か Windows OS の XP はまだまだ枯れるところまではいっていないし、主記憶の容量は通常の利用に決して窮屈さをもたらしていないと思っている。なによりも、復元ソフトの恩恵が、ハードディスク容量を何の不足もなく動作させている。パソコン環境はいいこと尽くめできたと勝手に自画自賛している。

一年後の３月には、次への５年を展望させる画期的なシステムが登場するのではないか。今から期待を寄せ、想像をたくましくしている。そのためにも、今は、次への更新に向けて導入準備作業に微力をささげている毎日である。